

著者・ろっきゅん

崖転落で異世界っんにちは  
〔伍〕



## 崖転落で異世界こんにちは【伍】

ろっきゅん

崖転落で異世界こんにちは【伍】

第一部・神仙伝

第伍幕

——奥義継承・その行方と、さらなる決意。

今生の別れと、旅立ちの意味を知りてなお、

己の意思で異世界転移、

騒乱と虐殺、飢饉、疫病、妖魔闊歩の地獄絵巻。

一粒の救いもない、古からの伝承の地、

天和へ——

「私のターン・泥——夜の部は姫様のターン！」

シュラは居間にいた。

銅羅の持ってきた無数にあった太刀に対して、拭い紙の上に目釘抜に打粉入れ。油塗紙に油を用意。その中で真剣を一本一本丹念に、そして丁寧に入手入れをしていたのだが。背後に桔梗が控えていた。

「な、なに、何言ってるの君は」

そんなシュラに童顔を十五センチ手前。姫付きの従者さんから顔を突き合わされていた。姫に勝るとも劣らない艶やかな黒髪はいつもポニーテール。切れ長の瞳だが、普段わざと眺めているのか時々大きくなるのを知っている。童顔に不釣り合いな、すらりとした鼻梁はもう少し年月が経てば美麗の女剣士といわれるだろう。

徹頭徹尾、自らの全てを姫に忠節として掲げる浴衣姿の少女。

でも、今日は半眼ジト目で顔を寄せていた。

「な、何故……なんで、そんな顔されてるの？」  
そしてシュラの問いに、

「我が主、智羽の瑠璃姫のターンなのでございます！」  
クワッ！

猛犬のように鼻に皺を寄せて、先と同じような事を言ってきた。

「い、いや、ターンって……、意味解ってるの？」

「御意。サクラ姫に根の堅州国の言葉を滔々と指南され、そして感銘を受けた桔梗は師事を乞いました。主に、いんたーねっツ、なるものを介して！」

——やべえな。

正直にそう思った。

「素晴らしいです、いんたーねっツ」

「あれは現代文明が生み出した害悪だ。まさに毒電波送受信機だ。あそこで見たのは忘れろ」  
「そうなのですか？」

「ああ、アンパ○マンの公式ページだろうが。ディ○ニーのネズミ野郎のプロポーションが書かれてようが、エロサイトだろうが、一切合財全部二十歳以上たってから見て下さい」

シュラは現在文明の全てを否定した。

けど、異界の武士娘様はそうはいかない。

「ぬう、二十も到達しておりませぬぞ!？」

胸元からセンス引きぬき机でピシャリ。

勢いで巨大な二物がドウルルンと揺れる。

ウホ、と視線が惹きつけられたシュラだが。女性に対して身体がもう引かなかったのは、午前中的一幕があったればこそだとシュラはただただ絹に感謝した。

「ですが、知識は知識。既に得てしまったのです！」

センスでビシッと彼女の頭部が示される。

「その知識によれば構曳き、こちらの言葉でデート。それは計画、プラン、誘いは、エスコート——一体、今宵の予定はどうなっているのか不安で御座います」

「無理にこっちの言葉混ぜんでいいですよ」

「訳解らない言葉ですね、こっちの言葉」

ツ、つと眼差しを反らされた。

何か色々聞かされたのだろうか。

目くぎから外した柄を握り。繁々と柄の紋様を見れば、どことなくかつて木葉の黒霧から得たあの小さな秘石を思い出す。

——あれは籠の中に入れっぱなしだった。

そんな事を考えていたら。

「言葉と言えば王よ。何で桔梗と王は世界が違うのに、同じ言葉で会話が成立しているのしょう」

「え、さ、さあ。そういえば天和の言葉って、俺には日本語にしか聞こえなかったんだよね」

「桔梗にも天和の言葉が聞こえます」

「でももしかしたら違う言葉を話してるのかもよ？ 何か通じるものがあって感覚で内容が共有されてるとか？ 文字は明確に違ってたんだしさ」

「なるほど」

「いや、話が脱線してるよね。一体何の話しをしにきたの？」

正直、彼女とはあまり深く話した事がないのでシュラも扱いが解らず困惑が隠せない。そんなシュラの言葉に桔梗が正座から頭をたれていく。

「王よ！」

「頼む、家で『王』は止めてくれ。サクラがそこで笑いを噛み殺してるから」

桔梗が台所に視線を向けると。台所で夕飯の仕込みをするサクラが、  
「ぶふっ、王だって、あの男が」ふきだしていた。

「うっさいよサクラ。お兄ちゃん向こうではちょっと凄い男なんだからね」

「赤点連打はすごかったけどね」

「……」

そんな会話にコホンと桔梗は咳払い。

「実は王よ、折り入って相談が」

「はあ……」

聞いちゃいない。

「改めてですが、今日の夜は姫君と王での二人きりの婿曳（あいび）きです」

「そうなっておりますね」

「それもこれも、後日この世界で執り行われる婚儀の為に、二人の仲をもう一悶着盛り上げる意味もあります！ 月に猛る王よ。荒ぶりの君よ。命授の子よ！」

クワ、つと武士娘が眼をかつびらいて名称総出演で絶叫する。

ぷっと、遂に耐え切れずサクラが何かを吹き出し噎せていた。

ついでにシュラも桔梗へ、一悶着ってなんだと突込みたかった。

銅羅が話したのでサクラも知っているが——数日後、婚儀が行われる。

しかも奔放な教育の賜物か、この件についてサクラは結構ノリノリだった。

『うっあ、凄い！ でも好きあつてれば結婚に年齢なんて問題ないんじゃない？ 重婚だっていいじゃんいいじゃん。ガツンとやちゃえお兄ちゃん！ だからサクラと有希奈がする時も認めてね！』

と、二人の、いや三人の仲をなんとも胆力勇ましく後押しをしてきた。

——さすがレズ思考。日本の定めた同性婚不可に反旗を翻し、本格的に有希奈と愛し合っている女だけの事はある。

シュラはそう納得していた。

でも、そう思えば月の森での出来事も自然と頭に湧いてしまう。

思わず面貌が染まってシュラは俯いた。

「どした、お兄ちゃん？」

「なんでもない……よ」

だからその件についてはサクラへ伝えていないのだ。

「一悶着は解った。で、どうしろと？」

「此度の行いに置いて姫様が桔梗は来るかと仰られます」

「はあ」

まあ、デートにまで付いて来られても困るだろう。

それはシュラも同感だ。

「なので王よ。認めて下さいませ」

「なにを？」

「背後から護衛する任。いえ、いつそ隣で護衛させてください、この式癒芙様から頂いた太刀で守らせて！」

クワッ！

と怖い顔をされた。

坂でも使われなかった桃の液が染み込んだという三尺五寸(約1・05m)程の太刀。

その真剣が初めてこんな事で抜かれてしまった。

——ズラッと！

「守らせて!!」

「平和な日本の、しかも落花生と富津岬しか名所の無い千葉県に誰から何を守るってんだ！  
てか危ね、切っ先こっち向けんな!?!」

太刀納刀。

への字口。

でも彼女は膝の上で扇子をビシヤリ。

もっかいクワッ！

「畏れながら——虚(うつ)けですか王は！(絶叫)」

「王にそこまでいう!？」

「見ましたよ、いんたーねっツ！ こっちでは、髪の色を抜いたり染めたりした悪辣漢が鼻に輪っかけながら、民衆が戦えないのを良い事に、良い女を見つけては道に森に暗がりに関連込み平然と集団で強姦、薬等を用い自我を殺して蹂躪するとか——……………下劣っナ!!!」

ギリ、つと齒を鳴らされた。

しかも再度抜刀、ビタッと頬一寸先で刃が止まる。

「——斬りったい……」

「おい……」

「髪の色を抜いた時点で、俺最強！ 民草とは存在が違う！ 俺ってばチョウアメリカジンニテルひゃっほー!! という意味だそうナ。つまり国の庇護はいらない。果し合いも上等。掛かって来いという意味もあるとか!……おもしれえ。良いでしょう……出会った瞬間、バッサリやってくれるわ……」

「そんな意味じゃねえよ!? 女の子にもてるためだけに——」

「そんな事に髪いじんな!」

立ち上がる少女が眦上げて、シュラの胸倉掴みあげる。

「ちょ、やめ、苦し……」

「そもそも髪色変えた位でなびく女なんぞ別の色違いが現れたら速攻転ぶわ! 本当に一人の女と好きあいたいなら、髪色にたよんな! てかそんなのに女が転ぶか、女なめんなクワ!」

「あれあれ、もしかして俺に矛先向いてないよね!？」

「向いてません! 可愛い子ですネ絹ちゃん!」

「結局向いてるじゃん!」

「王は染めてないから良い子!」

「もう髪にこだわらないで、染髪会社になられちゃう!?」  
まさに八つ当たりだった。

でも——駄目だ、この子に現代日本人の若者は視界に入れさせない方が良い。

本気でシュラはそう思った。

しかもさらに続く。

「侍所たるケーサツなるものも、この世界では基本放置！ 民事とか言って暴漢の、事が全て終わってから動くそうな！——腰抜けが!!!」

——一体誰から説明を受けたのだろう。

考えるまでも無い。

この家で男を嫌悪し同性に走った女は一人しかいない。

そんな彼女に現代の常識を歪んだ形で教わったのだろう。

——しかも、彼女……酒くさい。

「危ないのです！ クズ過ぎるのです千葉の男共!!! 弱り切って、赤子より弱腰の王は頼りにならない！」

「ほっとけ」

「ならば桔梗が守るのは当然ではないですか！」

「いやいやいや、そこらの男よりは俺はまだまだ行けると思うよ？」

「思う等と逃げ発言してる時点で負けてます！」

え——

ここまで断言されたらシユラは何も言えず。  
そんな二人に。

「——奈奈も同意！」

今度は居間の扉が突然スライド。

全て話は聴かせて貰った状態なのだろう幼女様がちょこんと立って。不遜に鼻の高さを斜め四十五度。

むふうと、力強く覇気を飛ばす。

ただ……

「奈奈。なんだお前……その恰好」

ボリ、ぼり、ぼり。



咀嚼音が室内に響く。

その幼女は、ふんわりとした白のひらひらつき肩だしワンピースを纏っていた。スカートも履いている。薄い青のヒラヒラで小さなお姫様。

さらに最近のふっわふわ髪も胸元に纏められて三つ編みが二つ。

靴下はピンクとホワイトの横縞模様。

特筆すべきはどこから出した赤いランドセル。縦笛なんかも設置済みだ。

小学校一年にも満たない容姿にランドセルはどうみても誰かの趣味にしか思えないが。犯罪臭が取り囲みそうなほどに異様に似合っている。

ぼり、ぼり、ぼり。

「なに……食ってんだお前」

「一歳からの初めてのぎゅっ。ロリ次郎にぎにぎボーロ」

「……」

「銅羅に雑貨屋で、良子バアから買ってもらった。凄く美味しい」

——あのロリコンフェミニスト何考えてやがる。俺と絹が高校言ってる間に奈奈と何してやがった。

問いたい事は多々あるが。奈奈が先を続けてしまう。

「銅羅にシュラの今までを語った。そのお礼でサクラの服もろた。ランドセルつき。可愛いかな?」

「え? あ、ああ……似あってて、可愛いぞ」

奈奈がポッと頬を染めて腕で顔を隠してよろけていく。  
だが、すぐに気を取り直して、ボーロでぼりぼり。

「今までの事、親父に話したんだ」

「うん。特に女関係。庵にねえねえ残して、絹ねえねえと姫と、神の山の娘。あ、ついでに弥勒の人妻と幼女にまで手を出して良い仲になった事も」

「……おい……」

台所でサクラが眉間に皺を寄せてこっちみてた。  
ついでに桔梗の眼差しが鋭く細くなっていく。

「そしたら銅羅は言った。女とあっちこっちでホイホイホイホイ。そんな手を出すような志道不覚悟の男にした覚えはない。そんな身に余る一時の幸せに絆されてるような男なら、いずれ女に愛想つかされ捨てられる。だから……そんな時がきたら、良かったら貰ってやってくれる言われた」

「——やっぱ何考えてんだ、あのじじい!？」

「でもお前は銅羅の想いと違い、餓鬼のころからやりまくってたんだろ？」

「……」

「すゆか？ 奈奈とこっちでも婚儀すゆか」

「しねえよ!」

「裏嫁にするんだろ？」

「そうだけど……」

また頬を染められ、両手で顔を隠された。

隣で桔梗が唇を△に降ろしてみつめているが無視した。

「あそこで奈奈も斬九郎となったお前と斬月の街ですでに——と、言ったら。お前のお父どうなったんだろうな」

「言わないでよ!」

「なら、その桔梗の願い、叶えてやれ。今のお前はまだやばい」

一瞬、昼間の高校。絹と姫央の前で出した鍊気もどきの事が頭をよぎるが、シュラはあえて頭を振って、「まだ、やばい……か」大きく溜息。そのまま奈奈に投げていた視線を、今度は桔梗に向けていく。

「そうです。私に頼んで下さい！ それとも王よ」

「……なに？」

珍しく桔梗が王と誰かの話に口を挟んできたような気がする。  
それだけ真剣なのだろう。そもそも彼女は主君に尽くす子。礼節を重んじ言葉づかいも丁寧だ。

「桔梗がいないところで、婚儀前に姫にエロイ事をする気ですか！ この変態！」  
「しねえよ!!!」

前言撤回。

シュラは溜息を大きく、それはそれは大きく衝く。

「いや、やってるか——」

「なにか？」

「なんでもないです」

そう、姫とはすでに弔癒扶の庵で——

「……なら、護衛を頼もうか。せめて気づかれないように……だけど」

その言葉に桔梗がパァッと明眸を輝かせた。

とりあえず瑠璃とのデートの時間はまだあるので、分解した太刀を掃除しながら元の姿に直していく。

「お前、手慣れてるよな」

その手つきをみつつ奈奈が言う。

「子供の頃から玩具代わりに真剣握らされてたからな。相手の指先と、太刀の柄みれば、そいつに馴染んでるかどうか位なら速攻わかるぞ」

えへんとシュラが鼻を鳴らす。

「最悪な幼少期ですね」

桔梗も言う。

「うっさいわ」

「握らされてた……か。ところでシユラ。明日、紫蘇という女に逢うらしいが何か聞いているか？」

「え、ああ」

奈奈がふいに告げた名。

でもシユラは、そこまで父は奈奈に話したのかと正直呆れていた。

——禄武の一族に助言を授け、俺が生まれた日に洗礼を施してきた女としか知らない。

それを告げるべきかシユラは瞬刻迷うが、必要ないと思いを帰結させる。

「結婚前の報告みたいなものをするらしいな。面識ないんだよ。なんかうちの後見人らしいんだけどさ……それが何か？」

「いや。そうか。ちょっと気になっただけだ」

そう言い捨てると奈奈は棒のポーロをカジカジ齧りながら台所へそそくさ之行ってしまう。  
奈奈曰く冷房が嫌いらしいが、なるほどとシユラは納得。見上げれば冷房がかなり強く作動していた。退避したのだろう。

そんな幼女様は冷蔵庫を開いてオレンジジュースを取り出すと、専用に買って貰ったマグカップに注いでいく。

「とりあえず、それ終わったら縁側で錬気の修行するぞ」

「わかった」

「集中しろよ。しないと闇闘気之衝激波（ダークウェイブ・ハウリングブラスター）を物にできないからな」

「わかった、よろしく頼——なんで、お前それ知ってるの！」

腰に手をあて奈奈が一気飲み。でも、そうじゃない。

「なんでお前しってるの！」

もっかい訊いた。

そしたら、げふう〜と息を吐き捨てられた。

「絹ねえねえに聞いた。学校の校門で風打ちを放つ時、突然シュラがそう絶叫したって」  
「絹さん何言ってるんだよ!」

へら、っと笑う奈奈が、半眼をチロリと向けてくる。

「今後……風打ちは、そのイカシタネームでいいんじゃないね?」

「やめてくれ、突っ込む場所が多すぎる! その名前も、その舶来後も、一切合切やめてくれ! そして名前の意味とかそこは突っ込まないで。色々事情があるんだよ」

納得したのか、しないのか。

そのまま奈奈は楽しそうに走り去っていく。

先ほど絹と姫が睨み合いながら武道場に向かったので、今度はそっちへ行くのだろう。  
キャットファイトを危ぶみ、銅羅と戌亥がむかっていったが。

「デート……か」

そして数時間後。

奈奈と今日の錬気修行を終えたシュラ。帰還してから背負ってない籠を背負わされた状態で、シュラと瑠璃は浴衣姿で隣町へ足を運んだ。

……今日の夜、それは丁度夏祭りが開催されるのだ。

祭囃子と拍子木が近づけば、太鼓の重い響きが大気へ広がっていた。  
積乱雲に茜色を映し、ひぐらしの鳴く声がさらなる彩を添えている。  
長閑な夕暮れ空を見たのは、一体いつ以来だったろうか。  
シュラは感慨深げに空を見上げていた。

まだ祭りの開催場には距離があるが、でもここにまで響く拍子木は、各町内に張り巡らされた古めかしいスピーカーからのCD音声だと思われる。

情緒もへったくれもないな、と、履きなれない下駄を鳴らすシュラは心底そう思う。  
せめてウレタンソールの草履で静々と隣を歩く瑠璃姫の為に、そんな野暮な事だけは言わな

いでおこうとシユラは思うのだが。

時刻は既に十七時を回り、夕涼みに祭りへ出るのは適していた。

ぺたぺた。

カラコ、カラコ。

二人の音だけが、やけに響く。

しかもシユラの腰には木刀が結わえられている。

禄武の者の嗜みと銅羅が持たせたのだが。

それよりも瑠璃だ。

天和のしきたりなのか。

姫はシユラの少しあと、数歩後ろを歩いているのだ。

ならば早すぎてないか。遅れてないか。はぐれないか。

男として、そして大切にしたい女性の一人が気になって背後を振り返る。

その度に、姫と眼差しがあい、恥かしそうに俯かれてしまう。

——可愛い……

素直にそう思う。

普段は桔梗が上手く髪結いをしているが。今日はかなり違うのだ。

大きく二つの三つ編みを作って後頭部で輪に。そのまま中央で赤いリボンを結わえて降ろしている。

大きな赤いリボンはサクラのアイデアだろうが、そのチョイスは黒髪に映え余りに美しくも可憐だった。さらに小さくも丸い眉も現代的ではないが、先日眼もとで揃えた際の前髪から見え隠れする様は彼女独特のチャームポイント。

あまりに撫子過ぎる美少女の存在に、シユラはただただ呆気にとられてしまっていた。

そんな子と二人で歩ける幸せ。となれば、もう一つ思う。

——手をつなぎたい。

斬月の街の時には余りの人の多さに勢いで手を繋いだが、改めて二人きりで真正面から求めた事はない。そう思えば誘うのはかなりきつい。

「あの、どうしました？」

ドキンと胸が高鳴った。

彼女が不思議そうに覗いている。何故か胸の鼓動が収まらない。

斬月の村で一緒に街を歩いた仲なのに。意外と良い雰囲気になった事もあるし。なにより逢って初日に、何かをしたらしい仲なのに。

なのにこの緊張はなんだろう。

「シュラ様、本当にどうされました？」

姫の問いに。

「あ、あの、さ。手を繋いでも……いいですか？ はぐれないように」

少しそっぽを向いて、手だけ差し伸べ伝えてみた。それでも心臓へ爆発しそうな負荷が掛かる。

もともと何かで自分と繋がっているという彼女。

初めての出会い後、駄月との戦いの後に逢った彼女は死んでいた。さらに錬気の五感への作用の為、感情の起伏に耐え切れずシュラはただ号泣した。

さらには死したがゆえにこの地に来て、本当に蘇生が促された瑠璃姫。

彼女には出会いから少し、普通じゃない。

それが、ようやく人並みのデートだというのに。

彼女は茫然と見つめているのだ。

——なぜ!?

彼女が断る道理が見つからない。